

アメリカ啓蒙における二つの共和国論の系譜

田中秀夫（京都大学）

第1 節 クレヴクール『農夫の手紙』

アメリカの商業的農業の魅力を説いたフランクリン、商業共和国の自由に期待したペインと比べて、アメリカを農業共和国として把握したのは、フランス生まれのクレヴクールである。彼は 1765 年にアメリカに定住して、ニューヨーク南東部に 120 エーカーの土地を購入して農民となった。故国から重農主義=自然支配の思想を持ち込んだ彼は自営農民として成功したが、独立革命の騒擾のなかで孤立し、ニューヨークを去る。王党派から植民地スパイの嫌疑をかけられ投獄されたものの、1780 年に英国に脱出し、1782 年に『アメリカ農夫の手紙』をロンドンで出版した。やがてフランスに戻り、ドゥドトー夫人のサロンでダランベールやサン=ランベールと交友するなかでフランクリンと知り合い、再度アメリカに渡った。その後、ニューヨークのフランス領事となってフランスとアメリカの橋渡しをし、ニューヨーク=ロリアン間の定期航路の開通に尽力、馬鈴薯の新栽培法をノルマンディーに紹介、牧草アルファルファをアメリカに移植したりした。農業を通じてジェファスンと親交を持ったが、フランス革命に巻き込まれ、波乱に満ちた生涯を終えた。レナル神父に捧げられた『アメリカ農夫の手紙』は、アメリカ事情をヨーロッパの友人に伝える 12 信から成る。第 2 信は「アメリカ農夫」の境遇、第 3 信は「アメリカ人とは何か」、第 4 信から 9 信まではボストン近くの島の描写、第 10 信がチャールズタウンの描写と奴隷制度、最後の第 12 信は独立戦争で苦しむ「辺境開拓者の悲哀」を描いている。

アメリカは寛容な国なので、貧民であれ、元犯罪者であれ、移民は土地耕作者として歓迎され、勤勉でさえあれば、豊かな大地の恩恵をうけて、数年で「独立自営農民」となって平穏で豊かに暮らせると繰り返し説かれている。「地上のほかの場所では、人口の多すぎるところがあるかと思えば、半ば絶滅してしまったところもある・・・いたるところで、間違った宗教や、暴政や、道理をはずれた法律が、人類を苦しめ悩ましている。ここでは、私たちは人類のかつての尊厳をかなりの程度まで回復している。私たちの法律は単純で、公正だ。私たちは耕作の民だ。私たちの耕作には限度がない。だからなにもかも裕福で繁栄している。」¹（手紙 1）「しかじかの土地が自分のものだと言えなかったあれほど多くのヨーロッパ人が、この幸福を実現するために大西洋を渡ってくるのも不思議なことでもありません。もとは荒れ果てていたこの土地も、父の手で素晴らしい農場に変えられ、そのおかげで、この土地が私たちのすべての権利を確立してくれました。この土地の上に私たちの地位、私たちの自由、市民としての私たちの権限、しかじかの地域の住民としての地位が築かれています・・・これがアメリカ農夫の、真の、そして唯一の、哲学と呼べるものです。」²（手紙 2）

「彼〔新来のイングランド人〕はこの国で、故国の勤勉さが新しい形で発揮されているのを目にし、それに、ヨーロッパで栄えているあらゆる技術、学問、創意の萌芽を、ここの人たちの仕事の中に探し出すのです。彼がこの国で見えるものは、美しい都市や豊かな村々や広大な田園を飾る立派な家々、素晴らしい道路、果樹園、牧場、それに橋などですが、そこは 100 年前にはなにもかも荒涼たる、森林の鬱蒼と繁る未開の地だったのです！・・・この社会は、ヨーロッパのように、あらゆるものを所有する大領

¹ クレヴクール『アメリカ農夫の手紙』、秋山健・後藤昭次・渡辺利雄訳『クレヴクール』（アメリカ古典文庫 2）研究社、1982 年、45-46 頁。

² 同上、58 頁。

主と無一物の一群の民衆とで構成されているわけではありません。ここには貴族も、宮廷も、王侯も、僧侶も、教会領地も、ごく少数の者にきわめて歴然たる権力を与えている隠然たる勢力も、何千の人びとを使用する大製造業も、素晴らしく優雅な贅沢品も、ありません。富める者と貧しい者が、ヨーロッパの場合のように、大きく隔たってもありません。少数の町は例外として、ノヴァ・スコシアからウェスト・フロリダにいたるまで、私たちは広大な地域に散在する耕作者の国民で、・・・互いに交流をはかり、寛大な政治の絆によって結ばれ、法律は公平ですから、その力を恐れることなく尊敬します。誰もがすすんで働きますから、私たちは皆、束縛を知らぬ自由な勤労の精神に動かされます。」³（手紙3）

第3信はアメリカを賛美してやまない。司祭はいるが会衆と同様に素朴で、他人の労働を貪ることのない農夫である。国王もいないので、国王のために働き、飢え、血を流すこともない。「私たちは今日の世界に存在する最も完璧な社会集団です。ここでは、人間は理想通りに自由で、この素晴らしい平等は・・・変わり易いものではありません。」⁴この偉大な避難所でヨーロッパから来た貧民は合流し、以前の貧民が市民となり人間となる。彼の国は「土地と、パンと、保護と、地位」を与えてくれる。移民のモットーは「パンのあるところ祖国あり」である。「偏見も生活様式も昔のものはすべて放棄し、新しいものは、自分の受け容れてきた新しい生活様式、自分の従う新しい政府、自分の持っている新しい地位などから受け取る、それがアメリカ人なのです。・・・ここでは、あらゆる国々から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっているのですから、彼らの労働と子孫はいつの日かこの世界に偉大な変化をもたらすでしょう。・・・アメリカ人は新しい原則に基づいて行動する新しい人間です。」⁵（手紙3）クレヴクールは、アレントがアメリカ独立革命に見た、新しい社会の「始まり」を先取りしている。

第2節 『フェデラリスト』と反フェデラリスト

独立革命で英国から独立したアメリカは自立の道を進む。1787年の連邦憲法案には反対論が強く、ハミルトン、マディソン、ジェイは世論を説得すべく『ザ・フェデラリスト』を刊行する。マディソン執筆の第10編、共和国論は有名だが、多くはハミルトン執筆で、彼の現実主義的な透徹した認識は、彼が分離主義的な邦を説得して連邦国家形成を指導する最適の為政者とした。経済関連の議論もハミルトンが執筆し、農工商の利益のバランスを追求する観点から、独立戦争の膨大な戦費の借入による信用失墜からの回復、貨幣と資本の不足の解消を喫緊の課題とした。しかし、反農業というニュアンスはない。

「商業の繁栄が、国富の最も有効で生産的な源泉であることは、今日、すべての賢明な政治家が気づき、承認している・・・商業の繁栄は、満足を与える手段を多様化することにより、また、人間の欲望にとっても、企業心にとっても、大切な目的物である貴金属〔貨幣〕を〔国内に〕導入し、その流通を増大することにより、人間に勤勉をうながすすべての回路が生き生きと、元気よく、機能し、勤勉によって、ますます活発になり、豊かになるのに役立つのである。たゆまず努力する商人、汗水を流して働く農民、積極的な職人、勤勉な製造業者、あらゆる階層の人びとすべてが、意欲的期待をもって将来を望み、汗の努力に対する喜ばしい報酬によって活気を増大し続ける」（第12編）⁶。農業と商業の対立も今では終焉した。「農業と商業の利益は、密接不可分に混合」している。農産物に新たな販路を開拓し、農業者に刺激を与える商業は「あらゆる形態の労働と産業の忠実な召使」であり、地価の上昇をもたらし、急増人口300万人の大半が従事する農業の利益を高める。

フェデラリストも共和主義者であったが、憲法に署名をしなかった反フェデラリストはより伝統的な

³ 同上、71-72頁。

⁴ 同上、72頁。

⁵ 同上、75-76頁。

⁶ Beloff, M. ed., *The Federalist or, The New Constitution*, Basil Blackwell, 2nd ed., 1987, p.54. 斎藤眞・武則忠見『ザ・フェデラリスト』福村出版、1991年、56頁。

共和主義者であり、政治における徳と自由を重視し⁷、常備軍に反対して民兵を支持した。フェデラリストは大国に共和政体を樹立でき、アメリカは統合しないと対外的脅威、国難を克服できないとしたが、反フェデラリストは邦の自治＝共和主義を有効と考えた。公論で運営可能な公共空間の規模には限度があり、中央集権的な統合国家は腐敗、専制に墮する危険性が大きい。彼らは農本主義的であったが商業に反感を抱いたわけではなく、中流の反フェデラリストは、農工商の経済的調和の理念を抱いていた⁸。

彼らはハミルトンの中央集権的経済政策に反対した。連邦国家主導の政策は地域的な公共空間の自由を破壊する。しかし、反フェデラリストは統一的な経済展望を欠き、議論は分裂していた。リチャード・ヘンリー・リーのような南部の反フェデラリストが反商業的な農本主義に傾斜したとすれば、ゲリーののようなニュー・イングランドのエリートは商業とウィッグ的共和主義の理念の和解を求めた。「フェデラル・ファーマー」のような中流の民主主義者は商人と独立自営農民の理念を反映した商業イデオロギーを擁護し、ウィリアム・フィンドレイは商業を支持しつつ龐大な富の蓄積に反対した。下層の反フェデラリストは市場からモラル・エコノミーの伝統を守ろうとした⁹。

農本主義者テイラーは、フェデラリストによる英国流の財政金融制度の導入は政治を腐敗させると批判した。彼は銀行を敵と見なした。銀行の支持者は強力な党派「紙券利害」—株式保有者、高給役人、貨幣階級と投機家—であり、彼らは社会の権利と利益に危険な存在で憲法を侵して腐敗させる。結果は公共の徳の基礎の解体である。彼はハミルトンの計画に共和主義的な国制の原理を破壊し、英国の宮廷型の統治に代えようとする陰謀を見た。「公債償還制度の意図、銀行創設が加速しようとする狙いは、1. 少数者の手の中への巨富の蓄積、2. 政治的な資金の原動力、3. 課税の帰結によって、共和主義的州議会から政治的重要性を奪うことによるその抑圧である。」彼は州の課税権、州の権利を擁護した。¹⁰

彼らの農本主義はアメリカのこの時期の主流であったかもしれないが、ハミルトンの専門的議論を有効に論駁できなかった。ハミルトンと独立自営農民の思想は平行線を辿る。けれども彼らは無駄にハミルトンに反対したのではない。アメリカは農業共和国論として繁栄を目指すべきだという彼らのヴィジョンは、検証された長い伝統のある有力な共和主義であり、反フェデラリズムは、テクノクラート＝ハミルトンに対立したファーマー＝ジェファソンの思想と一体であった¹¹。

第3節 ジェファソンの農民共和国

アメリカ啓蒙¹²を代表する思想家としてジェファソンとマディソン¹³は、アデア以来、共和主義者とされてきた。アデアはジェファソンの農民共和国論の起源をアリストテレスの共和国概念、有徳な自由人＝自営農民の共同体に求め、ジェファソンは「共和国は大国に適す」とするヒュームの近代共和国論を

⁷ これは今や優勢になりつつあるが、Pocock, *The Machiavellian Moment*, Princeton, 1975. (田中・奥田・森岡訳『マキアヴェリアン・モーメント』、名古屋大学出版会、2008年) 自由主義を強調する反論も強く Pangle, T. L., *The Spirit of Modern Republicanism*, Chicago, 1988; Appleby, J., *Liberalism and Republicanism in the Historical Imagination*, Cambridge, Mass., 1992. 中間的見解は Rahe, P., *Republics Ancient and Modern*, Chapel Hill, 1992.

⁸ Cornell, S., *Anti-Federalism and the Dissenting Tradition in America, 1788-1828*, North Carolina U.P. 1999, p. 83. 本書は反フェデラリストの政治経済思想を本格的に研究した貴重な研究である。

⁹ Ibid., p. 175.

¹⁰ Ibid., pp. 177-78.

¹¹ 両者の関係を重視するものとしては Banning, L., *The Jeffersonian Persuasion*, Ithaca, 1977, Cornell, S., *Anti-Federalism and the Dissenting Tradition in America, 1788-1828*, North Carolina U.P. 1999 など、断絶説は Cunningham, Jr. N.E., *The Jeffersonian Republicans*, Chapel Hill, 1957 など。

¹² May, H., *The Enlightenment in America*, New York: O.U.P. 1976. Ferguson, R.A., *The American Enlightenment 1750-1820*, Harvard U.P. 1997.

¹³ マディソンの共和主義については、中野勝郎「ジェームズ・マディソンの共和制観」、田中・山脇編『共和主義の思想空間』、名古屋大学出版会、2006年所収を参照。

媒介としてそれをアメリカに適用したという解釈を提出した。アメリカへの思想的影響についてロック以上にスコットランド啓蒙を重視する解釈もアデアに始まる¹⁴。ジェファソンはW・スモールから、マディソンはウィザースプーンからスコットランド啓蒙の遺産を学んだ¹⁵。二人のヴァージニア人の農本主義は独立自営農民と自由国家の関連を重視する政治的農本主義であり、彼らは共和国の理想的な市民を形成するものとして農本的生活を考えた¹⁶。フランクリンとハミルトンは都市の商工業を重視したが、総じてアメリカの啓蒙思想家は農民の簡素で有徳な生活を讃美した農本主義者であった¹⁷。伝統遺産にも、アリストテレスばかりか、キケロも農夫の仕事は最も高貴としており、トマス・スミス『コモンウェルス論』において国家へ最大の貢献をする独立自営農民論の基礎にもキケロの思想があった¹⁸。

スコットランド啓蒙のアメリカへの影響は重要である。1700年から1776年までの間に20万人以上のスコットランド系アイルランド人がアルスターから北米に渡った。彼らは長老派牧師の養成などのためにニュージャージー大学を設けた(1746年)。既にハーヴァード(1636年)、ウィリアム・アンド・メアリ(1693年)、イエール(1701年)の3大学があった。その後、スコットランド人が関係したキングズ・カレッジ(後コロンビア大学、1754年)、フィラデルフィア大学(後ペンシルヴェニア大学、1756年)、ロードアイランド大学(後ブラウン大学、1764年)が続き¹⁹、7大学を擁し学問に力を注いだ。ウィザースプーンはマディソン、ブレッケンリッジ、テイラー、フレノーに政治理論を教えた。独立宣言に署名した彼は、ハチソンの抵抗権論を継承し、植民地の反逆の正当性を説いた²⁰。

ジェファソンはロックなどのイングランドの思想、ヴォルテール、モンテスキュー、フェヌロンなどのフランス啓蒙思想の影響も受けており²¹、どの伝統が彼にとって決定的であったかは議論の余地がある。彼は1781年執筆の『ヴァージニア覚書』(1785年出版)質問19で、商工業と貿易を論じた。「ヨーロッパの経済学者たちは、あらゆる国家は自力による工業生産に努力すべきであるということを、一つの原則にしている。」環境の相違を無視して、この原則をアメリカに適用するのは疑問である。ヨーロッパの土地は耕作し尽くされ、余剰人口は工業に頼らざるを得ない。しかし、アメリカには「農民の勤勉を誘う無限の土地」がある。「すべての市民が土地の開発に従事するのが一番良いのだろうか。それとも、市民の半数が農業をやめさせられて、他の半数の人々のために製造業と手工技芸を行なうのが一番良いのだろうか。」「もし神が選民をもつとすれば、大地に働く人々こそ神の選民であって、神はこれらの人々の胸を、根源的に純粋な徳のための特別な寄託所として選んだ・・・耕作者の大部分が道徳的に腐敗するという現象はいまだかつてどの時代にも、またどの国民の間にも実例のあった験しがない。道徳の腐敗は、農民のように自らの生存のために天に頼り、自分の土地や勤勉に頼らずに、自分の生存のために顧客の不慮の災害や気紛れに依存しているような人々に捺された徴なのである。依存は追従や金銭絶対の考えを生み、徳の芽を窒息させ、野心の企みに都合のよい道具をつくり出す。」²²

ジェファソンの主張は単純明快である。「農民以外の市民階級の総計と農民の総計との比率」が不健全

¹⁴ Adair, D.G., *The Intellectual Origins of Jeffersonian Democracy*, Lexington Books, 2000 (written 1943). アデア、フィנק、ロビンズに始まり「共和主義総合命題」と呼ばれるに至る米国での共和主義研究の系譜はアップルビーの序文を見よ。

¹⁵ Adair, pp.24-26.

¹⁶ Adair, p. 18.

¹⁷ Commager, H.S., *The Empire of Reason*, Weidenfeld and Nicholson, 1978, p. 243.

¹⁸ A. Fitzmaurice, *Humanism and America: An Intellectual History of English Colonization 1500-1625*, Cambridge U.P. 2003, p.24.

¹⁹ Court, F., *The Scottish Connection*, Syracuse U.P. 2001, p. 16-17.

²⁰ Sloan, D., *The Scottish Enlightenment and the American College Ideal*, Teachers College Press, 1971, pp.138-39.

²¹ Wilson, D.L., "Thomas Jefferson's Library and the French Connection", *Eighteenth-Century Studies*, Vo. 26, No.4, Special Issue: Thomas Jefferson, 1743-1993: An Anniversary Collection, (Summer, 1993), pp. 669-685.ジェファソンの蔵書は1783年に2,640巻、フランス滞在で2,300巻を加え5,000巻に至る。規模はチュルゴやスミスの蔵書に匹敵する。

²² ジェファソン、中屋健一訳『ヴァージニア覚書』岩波文庫、1972年、297頁。

な部分と健全な部分の比率であり、腐敗の程度を測るバロメーターである。彼は都市を嫌悪し、農民共和国を有徳な共和国と考えたが、しかし自由貿易を擁護した。「あらゆる国の平和と友情とを培うことに我々は努力すべきであり、我々を最も傷つけてきた国に対してさえも、その国に反対する我々の主張が通った暁には、同様の態度で臨むべきである。通商の扉を開き、通商上のすべての拘束を取り払うこと、言い換えれば我々の港に運び込みたいと思うものを何でも持ち込むための完全な自由をすべての人間に与え、同じことを相手側にも求めることが、これからの我々の関心事となるであろう。」²³

この独立自営農民 (yeoman) を重視する農民共和国論は、産業としての農業賛美ではなく、政治的な観点からの、有徳な生活を可能にするものとしての農業讃美である²⁴。農民共和国は、同じヴァージニア人のマディソンも共有したが、ハミルトンは認めなかった。1792年にジェファソンとハミルトンの確執が始まる。その根底には異なる国家像があった。農本主義的自由貿易論者ジェファソン²⁵と製造業重視の保護主義者ハミルトン。ジェファソンの農民共和国論はテイラーなどの農本主義に受け継がれた。

第4節 ハミルトンの商業共和国

ハミルトンは1755年に英国領西インド諸島に生まれ、1772年に北米植民地に移住した。独立革命では愛国派に属し、1777年に総司令官ワシントンの副官、その後フェデラリストとして活躍した。1789年にワシントンが初代大統領になり、ハミルトンは初代財務長官に任命される。弱冠35歳のハミルトンは中央集権的な国家を形成することに努力し、ハミルトン体制として知られる経済政策を行う。『製造業に関する報告』(1791年)においてハミルトンは結論として二点を述べた。第一に「繁栄する農業を基礎とする製造業が栄えている国」は農業だけの国より貿易収支が順調になる確率が高い。第二に、前者は後者より多くの貨幣を得る²⁶。ハミルトンは農業を否定したのではないが、製造業を重視した。

ハミルトンはアメリカのように製造業が幼弱な場合、奨励金による保護を説いたために、リストなどから保護主義政策の典拠とされた。しかし、それは彼の政策の一部に過ぎず、「公信用に関する報告書」では、独立戦争の借入＝累積公債による信用危機を克服するため、連邦銀行の設立、戦時公債の借換を提案し、公信用の確立を説いた。彼は重農学派を退け、重商主義的な金融利害に加勢もせず、ヒューム、スミスの農工分業論＝国内市場論＝国民経済論を継承した。しかし、ハミルトンはスミスの自由貿易論を拒否し、保護主義を支持した。自由貿易論者としてスミスの自由主義を継承したジェファソンは、スミスの農工分業＝国内市場論は広い国土と繁栄する農業を持つアメリカの特殊性に適しないとした。ジェファソンは製造業を重視しない農業共和国論者であった。スミスは資本投下の自然的順位論に基づき、農業の生産性を製造業以上に評価したから、農業に投資する余地のあるアメリカはヨーロッパより遥かに成長が早く、人口も25年に倍増すると見た。それはフランクリンとジェファソンの見解でもある。

ハミルトンは、アメリカを未だ農業国と認識していたが、スミスの農業生産性優位論を疑問とし、農業中心の自由貿易ではアメリカを富裕にできないと考えた。彼は経済運営には賢明な為政者の介入が必要としたから、重商主義者だとかジェームズ・ステュアートの影響が濃いとされる。しかし、ハミルトンはそれ以上の経済学者であり、スミスの農工分業＝国民経済論と重商主義が得意とした貨幣政策の遺産をアメリカという特殊な条件の国の経済政策に生かそうとした商業共和国論者であった²⁷。

²³ 同上、312頁。

²⁴ Adair, D., *op.cit.*, pp.18-19. 明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』(ミネルヴァ書房、1993年)。

²⁵ ベイリンは、ジェファソンも次第に国内市場向けの製造業の意義を認めるようになったと指摘をしている。Bailyn, B., *To Begin the World Anew*, Alfred A. Knopf, 2003, p.51.

²⁶ Hamilton, A., *Papers on Public Credit, Commerce and Finance*, ed. by Samuel McKee, Jr. Columbia U.P. p. 226. ハミルトン『製造業に関する報告書』(田島恵児他訳) 未来社、1990年、69頁。

²⁷ McNamara, P., *Political Economy and Statesmanship: Smith, Hamilton, and the Foundation of the Commercial*

商業共和国は大ブリテンの国是であった。海洋帝国として第二次植民地時代に入った英国は世界の工場となった。ハミルトンの商業共和国構想は大英帝国と競いあう未来を予想させる路線である。ジェファスンらの農業共和アメリカのほうが、英国との関係では親和的であった。アメリカが偉大な農民の国ではないけない理由はないから、農業国家であり続けたとすれば、世界の歴史はどうなっただろうか。

第5節 アメリカの価値と腐敗

建国者は統合された国民を創出しようと努力した。1788年の合衆国憲法の批准によって、ベンジャミン・ラッシュは「われわれは一つの国民となった」と明言した²⁸。啓蒙の普遍的価値と祖国への献身は矛盾しなかった。イングランドの保守的貴族は、反抗的な労働者を創り社会を不安定にするのを恐れて大衆教育に反対したが、アメリカのエリートは庶民教育を支持した。「人民大衆をより均質にし・・・平和な統治に適したものにする」ために「統一した全般的な教育制度」を設ける必要があった²⁹。1790年頃のアメリカは後進国であった。華麗な宮廷もなければ絢爛豪華な都市もなく、音楽堂も美術館もなかった。イングランド銀行のようなものはなく、株式取引所も、大商事会社も、便利な交換手段もなかった。人口の95パーセントは小さな村に住んで農業に従事していた。2500人以上の都市は24都市、人口1万人の都市は5つしかなかった³⁰。それでもアメリカ人は自らを世界で最も啓蒙された国民と思っていた。アメリカは啓蒙の普遍的な価値に依拠して創られた最初の国で、例外的で独特であった。

アメリカの啓蒙思想家は教育に力を注いだ。独立革命時に大学の数も本国を凌いでいた。蔵書も増え出版業も栄えていた。ジェファスンの5千点の蔵書は後に議会図書館の基になる。アメリカは郵便制度をヨーロッパより急速に樹立し、それが新聞の広範な普及を可能にした。1810年までにアメリカ人は毎年376種の新聞を2200万部購読し³¹、人口の半数が16歳未満、20%が奴隷で読み書きできなかったが、新聞の流通部数は世界のどこよりも多かった。人間は平等で、教育によって知的能力を高め、均一な国民になれる。合衆国の市民＝国民になるのに必要なのは啓蒙の価値の習得であった。アメリカ人は多数の人道団体設立し、社会的弱者を救い、野蛮な処罰の緩和を目指した。ヨーロッパ流の監獄ではなく矯正院が望ましい。ジェファスンたちは身体刑の廃止に着手し、彼の案では死刑は反逆罪と謀殺だけとされた。英国では死刑になる犯罪は200以上あった。ペンシルヴェニアでは死刑は謀殺のみに残し、身体刑を全廃して罰金刑が懲役にした。牢獄に代わり「矯正の学校」矯正院がペンシルヴェニアで設けられ、ニューヨーク、ニュージャージー、コネティカット、ヴァージニア、マサチューセッツが続いた³²。

アメリカの独立革命は普遍的な価値を持つ革命として後世に多大な影響を与えた。しかしアメリカは独立革命後1世紀もの間、奴隷解放を認めなかった。彼らの人権思想には欺瞞があった。そもそも入植者は現地人を力で追い払いプランテーションを築いた。原住民と奴隷とされたアフリカ人の抑圧の上にアメリカの建国の歴史は構築された。深く浸透したこの腐敗をアメリカはいつ払拭できるのであろうか。

Republic, Northern Illinois U. P. 1988. Crowley, J. E., *The Privileges of Independence: Neo mercantilism and the American Revolution*, The Johns Hopkins U.P. 1993. 田島恵児『ハミルトン体制研究』勁草書房、1984年、中野勝郎『アメリカ連邦体制の確立—ハミルトンと共和政』東京大学出版会、1993年。前者は経済政策に限定して「ハミルトン体制」を詳細に分析しているが、共和政への関心がないのでハミルトンの全体像に迫りえていない。後者は経済政策論では田島を継承しつつ、共和主義者としてのハミルトンの連邦体制形成過程を描き出している。

²⁸ Wood, G. S., "The American Enlightenment", *America and Enlightenment Constitutionalism*, eds. By G.L. McDowell and J.O'Neill, Palgrave, 2006, p. 159

²⁹ Wood, op.cit., p. 166.

³⁰ Wood, p. 160.

³¹ Wood, p. 166.

³² Wood, pp. 167-68.